

学会発表渡航支援報告書

(ふりがな) 氏 名	まつたに みのり 松谷 実のり	所属・職名 京都大学大学院文学研究科修士課程
e-mail	herb.est12@gmail.com	
発表題名 (英語)	Young Japanese Emigrants to Asian Countries: Institutional System, Factors of Deciding Migration, and Their Life Strategies	
著者名	Minori Matsutani	
会議名 (英語)	Graduate Student Workshop on Researching Migration In/Out of Asia	
開催地(国、市)	Singapore, Singapore	
参加期間	2010年3月8日～3月10日(3月8～9日は International Conference on 'Migration Methodologies: Researching Asia')	
<p>報告者は、2010年3月8～9日にシンガポール国立大学にて開催された International Conference on 'Migration Methodologies: Researching Asia' に出席し、最終日の3月10日に学生向けのワークショップである Graduate Student Workshop on Researching Migration In/Out of Asia にて修士論文のために実施した調査についての報告を行なった。シンガポール国立大学はアジアにおける移民研究の拠点として有名であり、本会議にはマイグレーションスタディーズという共通点をもとに社会学、人類学、地理学等の研究者が世界各国から参加し、アジア内／アジアからの移民研究の方法論について学問横断的な議論が交わされた。</p> <p>カンファレンスは2日間、6パネル19名の研究者による報告が行なわれた。子どもを対象とした調査のためのテクニック上の工夫等、各研究者の独特の手法が報告されるとともに、研究者のポジショナリティをめぐる諸問題についての議論、また質的調査や数量調査、複数の調査方法を組み合わせる方法の限界とその乗り越えをめぐる議論が白熱し、調査の方法論が常に自己反省を伴いながら研磨されつつあることを実感することができた。</p> <p>最終日のワークショップでは報告者を含む5名の学生が各自の研究・調査内容について発表した。シンガポールのセックスワーカー、送出国に残された高齢者、日本人とフィリピン人エンターテイナーの子ども等、アジア地域に関わる移住現象の中から多彩な対象が取り上げられた。着眼点の独自性が際立つとともに、調査手法上の困難や工夫についても率直な意見が出た。報告の時間と質疑応答の時間がしっかりと取られており、フロアとの間で熱心な意見交換がなされた。</p> <p>報告者は香港・上海へ向けた若年日本人移住者について、調査方法と得られた知見について報告した。移住者の移住動機や移住を通じた戦略を移住者自身の視点から明らかにするためにインタビュー調査を、また移住ルートと仲介エージェントとしての人材紹介会社の役割を解明するために人材紹介会社への聞き取り調査を行なった。知見としては、人材紹介会社がトランスナショ</p>		

学会発表渡航支援報告書

ナル化する移住ルートの形成を補助し、移動のための拠点として機能している点、移住動機に日本国内の雇用の流動化等の労働問題がある点、香港と上海という2地点の選択には異なるプル要因が働いており、経済的要因や文化的要因が複合的に関係している点、移住の目的が海外でのキャリアパス形成やより満足度の高い生活のための彼等の生活戦略であった点等を紹介した。

Brighton 大学の Rebecca Elmhirst 先生・Illinois 大学の Martin Manalansan 先生兩名から丁寧かつ的確なアドバイスをいただいた。とりわけ焦点となったのは、彼ら移住者のコミュニティ形成とジェンダー問題についてであった。近年の若年移住者が、駐在員を主要な構成員とする日本人会とは別の場所で、インターネットのソーシャルネットワーキングサイトを通じてゆるやかなコミュニティを形成しているという事実について、インターネット空間そのものがフィールドとなりうるのであり、新しいコミュニティの形成過程を追うことには学問的意義があるとのことであった。ジェンダー問題については近年移住者における男性割合が増加し、日本国内のジェンダー規範のみを移住動機と見なすかつてのシンプルなフェミニズム移民論が通用しなくなっている一方、地位や収入の格差は残存するなど問題が複雑化しているため報告者が明言を避けた部分であり、今後精査を計りたい。また、対ヨーロッパではなく対アジア移住において、日本との距離的近接が家族という親密圏の形成／再形成にいかに関与しているか、さらにはアジア型のコスモポリタンは生じうるのか、生じうるならばどのような形態として現われるのかについて疑問を投げかけられた。これからの課題として取り組むべき複数の問題を指摘され、大いに刺激を受けた。

他の発表やフロアとのやりとりの中で異なる領域や異なる文化背景からの視点を学び、さらには共通した関心を持つ他の若い研究者との交流もでき、今後の研究につながるたいへんよい機会となった。